

news

THE MUSEUM OF MODERN ART, WAKAYAMA



佐藤時啓 Gleaning Light シリーズより《The Bridge》2005（平成 17）ピンホール写真、発色現像方式／作者蔵
なつやすみの美術館 3「美術の時間」展より

2011年に始まった「なつやすみの美術館」展は、今年で3回目を迎えました。夏季休暇中の子どもたちを主な対象とするこの展覧会では、学校や地域と連携した事業に取り組んでおり、その歩みは着実に前進しているという実感もあります。ここでは展覧会としての企画の経緯から学校教育との連携を中心とした一連の活動までを、まとめてご報告します。

▶▶▶ さあ3回目、何にする？

展覧会のタイトルを考えるのは、実はなかなか難しい作業です。内容を端的に表し、かつ興味を持ってもらえそうな言葉を探さなければなりません。来館者が目にするのは、内容よりも先にタイトルですから、責任重大です。

内容に合わせてタイトルを考えるのなら、まだ手掛かりはあります。しかし今回の「なつやすみの美術館3」は、そうではないところから始まりました。つまり、内容がまだ何もないところから、先に展覧会の名前を付けたのです。

初年度は『『みること』『うつすこと』』という副題で写真や版画が取り上げられ、比較的具象的なイメージの作品が多く並びました。筆者が担当した2年目は、前年同様に「なつやすみ」と付けることで子どもたちに向けたものであることが伝わりやすいと考え、シリーズ名として継承しました。しかし前年とは趣向をはっきりと変えるため、非具象的、あるいは幾何学的な造形をテーマにして、「かたちと色のABC」と題しました。そして3年目。具象/非具象という対極は使ってしまったので、何か別の策を練らなければなりません。自由にテーマを設定できるとは言うものの、しかし自由ほど難しい問題はありません。

そこで今回は、立場を変えてみることにしました。美術館側の立場を離れ、今の子どもたちにとって「美術」とは何を指すのだろうかという問いから出発することにしたのです。自分自身が「美術」という言葉に接したり、使ったりしたのはいつだったのか。友達との日常会話に「美術」という言葉が出てくるのはいつなのか。それは小学校では図工と呼ばれていた科目が、中学校に入ると美術と呼ばれるようになる時ではないでしょうか。つまり子どもたちにとって美術というのは、科目の名前であって、時間割に書かれている文字であって、友達に予定を尋ねるときに口にする言葉であるのです。「ねえ、明日の美術の時間って、持ち物なんやっただ？」と。——そう、それが今回の展覧会のタイトルになったのです。

▶▶▶ 「時間」ってなんだ？

～和歌山美術館教育研究会での検討

タイトルが決まってしまうと、テーマは決まったも同然です。その名の通り、「時間」について目を向けることにしました。しかし目を向けると言っても、一体どこに？ 手で捕まえることも、目で見ることできない「時間」——なのにこの世の中には「時間」と切り離せないものはなく、見方によってはどんな作品でも時間と関わりを持つと言えるのです。展覧会としてある程度の方向付けはするものの、それが子どもたちにとって関心が持てる切り口なのか、なかなか確信が持てません。一体この手強い相手をどうしたものか。まずは相手をよく知ることから始めました。

その強力な後押しとなってくれたのが、「和歌山美術館教育研究会」(以下、研究会)です。これは有志の先生方や教員をを目指す学生、教育普及課の学芸員が、美術館を活用した教育について考え、実践するための定期的な集まりですが、そこで展覧会のテーマについて検討してもらう時間を設けることにしました。

まずは「時間は『 』である」というフォーマットで、思いつく限りの言葉を挙げてもらい、たくさんのキーワードを集めました。すると、目に見えないもの、流れて



まずはテーマや主要作品について検討しました



実際の作品を見ると、イメージも膨らんできます



会期直前の研究会では校種ごとにグループに分かれ、全出品作の図版を見ながらワークシート制作に取り組みました

ゆくもの、歴史、思い出、平等など、全部で186もの言葉が集まりましたが、「無限/有限」や「計れるもの/計れないもの」など、相反する概念も数多く出てきたことは興味深い結果でした。しかしたくさん集まったとは言え、種々様々な表情を見せる「時間」を扱う術が見つかったわけではなく、ますます混沌とするばかりです。よって相変わらず手強い「時間」をどうにかやっつける、その方法自体を切り口を、展覧会の章立てにしました。時間とは何かとその諸相を受け身で捉えるのではなく、時間をどう扱ってみたいかという能動的なアプローチを意識して、「時間を○○する」ことを企んだのです。

▶▶▶ 夏休みの宿題と

「先生たちが作ったワークシート」

テーマについての検討だけでなく、今回、研究会で主体的に取り組んでもらったことがあります。それは先生方が宿題とし



出来上がった3つのワークシートは、下敷き・鉛筆も添えて、会場入口付近に配置しました



展示構成

- [イントロダクション]
- [1時間目：—を止める]
- [2時間目：—を動かす]
- [休憩時間：マンガの時間]
- [3/4時間目：—を記録する/記憶する]
- [5時間目：—をつなげる]

て活用できるワークシートの作成です。過去2年の「なつやすみの美術館」展だけを見ても、近隣の中学校を中心に、多くの生徒が来館するようになっていました。彼らは学校で配布された宿題プリントを手にしていたり、あるいは来館して感想文を書くように指示されていたりと、さまざまな宿題を抱えていましたが、宿題を作成した先生が展覧会や展示作品の内容にどのくらい踏み込んでいるか、意識の違いも確かにありました。その背景には、夏休み前に準備をできる時間が(会期の都合もあって)あるかどうかという問題であったり、地理的な問題であったり、さまざまな要素が絡まっていますが、どの先生も試行錯誤されていて、簡単ではないことは間違いのないようでした。それは言わば、先生にとっての夏休み(前)の大きな宿題にも見えてきます。

夏休みの宿題は一人でやるより、みんなで行った方が楽しいと思うのは筆者だけでしょうか。友達同士で集まって宿題をす

るように、先生同士が集まり、一緒に考え、一つの共通課題を仕上げてしまえば、「宿題」も完成し、一人ではできないものが作り上げられると考えたのです。そこで、春から広く先生方に声をかけ、研究会を活動の場とし、美術館はそのための検討材料を用意することにしました。

また、先生方が集まって共同作業をするには、もう一つ大きな目的もありました。それは図工・美術教員が減少している現状において、美術館を活動拠点として提供することが、将来的にも助けになるのではないかとというものです。現在、図工・美術教員は各学校に一人いれば良い方ですから、課題について校内に相談できる仲間や先輩教員がいない状況です。またベテランの先生にとっては折角の経験を引き継げる場がないように思えます。美術館での課題制作を通して、先生方が意見やノウハウを交換することができるになれば、地域の美術館としての役割を開拓することにも繋がらないかと考えました。そしてそれは、学校教育と美術館の連携において、来館した生徒に対して学芸員が直接トークをするよりも、より確かなアプローチになるのではないかと。

幸い、実作品を前にしての検討会やモニターを使った最終的なワークシート制作日にはたくさんの先生にお集まりいただき、小・中・高の校種別3パターンのワークシートを仕上げることができました。学校で印刷して宿題として配布されたところもあれば、美術館でプリントを受け取ってくるよう指示された学校もありました。そして宿題とは関係なく、たまたま来館した人までもが手にする場面も見受けられました。内容については、さらに経験と検討を重ねてゆかねばなりませんが、まずは共同で作上げることができたことは、一つの成果と言えるでしょう。

▶▶▶ 美術館に行くこと

ところでなぜ、夏季休暇中に美術館に行くという宿題が出されるのでしょうか。そもそも宿題が出るということが、特に美術に

まで宿題があることが、子どもたちにとっては面倒なことかもしれませんが、どの科目の先生も、夏休みだからこそできることを考えて課題を設定しています。そして、当館に限らずともどこかの美術館に行くことを宿題にする学校が、近年増えています。

その背景には、和歌山県に限ったことではありませんが、まだまだ美術館という場所に足を踏み入れたことのない子どもたちがたくさんいるという現状があります。大人になるまで美術館というところに行ったことがなかった、あるいは今もまだないという人も、少なくないでしょう。そのため学校教育のカリキュラムとして来館し、展覧会鑑賞の経験をするのが最善だと考えられますが、地理的・時間的制約もあって、どの学校においても容易に実現できることではありません。夏季休暇中に課題として来館させることは、その現実的な解決策の一つともなっています。

また新学習指導要領の中では鑑賞活動の推奨が明記されています。これまで手を動かして作り、表現することが中心であった図工・美術という科目において、作られた表現からその良さを味わい、言葉によって説明し、他者と意見を共有し、さらには創造的な活動へと還元してゆくことが求められています。そういった背景から、美術館と学校が関わる必要性がますます高まっているのです。

とはいえ、そういったことを抜きにしても、美術という科目の好き嫌いは、絵を描くことが得意かそうではないか、ということに左右されがちですので、まずは「観るのが好き」という子どもたちがもっと増えてほしいものです。それを支えるのが、観る経験であることは言うまでもありません。夏季休暇中に限らず、普段から来館してほしいのですが、「なつやすみの美術館」展がまずはその一歩となることができればと考えています。

▶▶▶ 子どもたちの目線

ところで美術の先生方から、「美術部は実際のところマンガ部になっている」という



マンガにおける時間表現の特性を最大限に活かした例を、実際に紹介しました

ことをこれまでよく耳にしていました。それは幾分、従来の美術表現には興味を持ってくれないという嘆きのように聞こえてきます。マンガやテレビ、映画、ネットの動画、携帯で撮った写真……色々な視覚情報が今の子どもたちの周りにはあふれていて、それらはすべて美術とも関わりを持っているのですが、子どもに限らず一般的にも、そうは捉えられてはいません。そのため、マンガは好きだけれど美術は馴染みがない、あるいは「美術」というと少し難しような、難しく考えなければならぬような、そんなイメージがまだまだあるように思われます。

では翻って、子どもたちにとって身近なマンガを何らかのかたちでいつか展示に組み込めないだろうか。この漠然と抱いていた思いを、研究会での話し合いを通じて、実現させることができました。というのもマンガは近年、教科書の中でも取り上げられています、その一部が美術における時間表現の項目にあるからです。先生方から、折角なら今回の展示の中に取り込めないかという言葉を得られたことは、くすぶっていた企画者の背中を押してくれることとなりました。教科書ではマンガとの関連で絵巻物も紹介されるため、急いでお隣の和歌山県立博物館に、スピード感や動きをよく表している絵巻物はありますかと相談し、それを展示させてもらうように準備を整え、興味深い時間表現を行っているマンガをも資料として展示に組み込むようにしました。こういった具体的な子どもたちの目線や、教科書ではどう扱われているかなど、



同じ絵巻物でも美術館で見ると、目を向けるところが違うという声をたくさん聞きました

よりリアリティのある着眼点について、研究会では意見を交わすことができました。

▶▶▶ たまごせんせいの「わくわくシート」

すでに教鞭を執っておられる先生方に加えて、積極的に関わりたいと思っていたのが未来の先生、つまり教員を目指す大学生たちです。

上述した通り、新たに求められる鑑賞教育の必要性に比して、その実践は容易ではありません。先生自身が指導を経験できる機会もまだまだ不十分です。だからこそ将来、学校現場で美術館を活用できるよう、大学で学んでいる間に、その機会を持ってもらうことが良いのではないかと考えました。そこで和歌山大学教育学部美術専攻の皆さんにご協力いただき、美術館と合同での授業枠を設定して、この展覧会を通した鑑賞活動の実践を課題としてもらいました。受講生は女子学生4人の小さなゼミですが、少人数だからこそ美術館と密接に関わってもらうことができました。

具体的な課題としてはできるだけ研究会に参加して先輩教員の方々からも学びつつ、何らかのワークシートを作ることを提案しましたが、話をしているうちに、彼女たちはみな、マンガが好きだということがわかりました。それは先の先生方の話にあった「絵を描くのが好きな生徒はマンガを描くのが好きな生徒たち」という世代が、すでに大学生になっているという事実でした。ならば展示内容にも関連することですし、マ

ンガ仕立てのワークシートにすれば、教員らの手による校種別ワークシートとは違うアプローチにもなって良いというアイデアが出たのです。美術の教員だからといってマンガを描けるものではありませんから、彼女たちだからこそできることをかたちにして見せてくれたのは、「絵を描くこと＝マンガを描くこと」という世代に対する私たちの見方を、少なからず変えたように感じます。

会期中は展示室で、子どもたちとのトークを実践することを課題としました。「たまごせんせいとわくわくアートツアー」と題し、会期後半2週間の平日合計8日間を設定し、毎日3回、合計24回を、基本的に2人ずつが交替で担当して実施しました。「たまごせんせい」とは先生のたまご、つまり将来の教員という意味ですが、展示室ではわれわれも大学生とは呼ばず、彼女たちにもそう名乗せました。それは「先生」と呼ばれることにはまだ少し抵抗があるけれども、「せんせい」と名乗ることで、人前で話をしやすくなることを狙ったことです。多い回では50人の参加者となり、グループ分けする必要もありましたが、合計で248名、各回平均10人を対象としたトークとなりました。

本番に先立って、夏休みの直前に和歌山大学教育学部附属小・中学校の児童・生徒が授業として来館することになったのを、練習の機会とすることができました。しかし学校の授業で来館する子どもたちに接すること、保護者に連れられて、あるいは友達同士で来館した、初めて顔を合わすも



章立てごとに分担して作り上げた全10ページの「わくわくシート」



自分たちをマンガに登場させたため、参加者に名前を当ててもらうことができました



子どもたちの気になったところを、一緒に見てゆきます



セリフを読み合ったり、意見を聞いたり、とても活発な回もありました

の同士のグループを対象とするのでは、勝手が大きく違ったことは事実です。それでも、さまざまに飛び出す意見を拾い上げながら、作品の面白さを共有しあうという経験は、将来に向けた実践的な訓練になったことでしょうし、大人も子どもも新鮮に感じていたようでした。何より、来館者と同じ立場で、同じ目線で話をする姿など、われわれが学ぶべきところも多くある実践となりました。

▶▶▶ 子どもギャラリートーク

学芸員が担当した教育普及事業についても紹介しましょう。初年度の「なつやすみの美術館」展から行っているものに、「子どもギャラリートーク」があります。従来の



協力しあって佐藤時啓氏の作品を組み立てます



グルグルと動く作品を、みんなでスケッチしました

ギャラリートーク（フロアレクチャーと呼ぶこともあります）が、一通りの展示解説であるのに対し、取り上げる作品を絞って、より子どもたちにわかりやすい形態でのトークをと考えて名づけたものですが、実際には大人の参加者もたくさんいらっしゃいます。今回筆者は、

- ①複数人で行うから面白いこと
- ②何らかの道具を使うこと
- ③作家の視点を追体験できること

という3つの狙いを設定し、3作品を対象としました。

最初に取り上げたのは、ピンホールカメラを球体につないで撮影した、3段×8列=24の画面が並んでいる佐藤時啓の写真作品（表紙図版）です。全体を眺めると、一見、一つの自然な景色のようですが、実際は上下左右前後が一度に見えている不思議な世界です。その不思議さを直観的に理解するため、まずは作品を観察したあと、個々の画面を別にプリントしたものを、実際の作品は見ないで並べてゆくというパズルのような作業をしました。それによって参加者はあらゆるところがつながっていることに気が付き、画面の切り取り方は作家が選択的に行ったものだということに辿り着くことができました。

次に鑑賞したのが、ゆらゆらと動いて定まらないジョージ・リッキーの彫刻作品です。直線で構成された単純な形態です。これをスケッチしてもらうことにしました。しかし動いている作品をどのタイミングで描けば良いのか、すぐに形を変えてしまう作品を追いかけるのは、簡単ではありま

せん。それでもそのバランス感や、どこがどう動いて面白い形を見せるのかなど、よく観察することにつながってゆきます。

最後の作品はハミッシュ・フルトンによる、自ら歩いた旅の経験を写真と言葉で残した作品です。フルトンの写真をよく見ると、それがモノクロであるためにどこか記憶や思い出のイメージを強めていることに気がつきます。参加者にはその歩くという行為を真似て展示室を回ってもらい、そこで目にした残しておきたい景色を、カメラで撮影してもらいました。それをこちらでモノクロにプリントアウトして、渡した台紙に貼ってもらい、そこにフルトン同様、言葉を付けてもらうことで、展示室で共有した時間を残すことを試みたわけです。

これらの方法はまだまだ実験的な試みに過ぎませんが、一連の「作業」を通じて参加者同士が言葉を交わし、自然に作品についての意見を発することができるようになるとも感じています。結果として作品についての理解も、深まっているのではないのでしょうか。少しずつですが、実践を深めてゆきたいと思っています（ので、次の機会にはぜひご参加ください）。



筆者の「残したい景色」は、参加者の記念写真にしました

▶▶▶ 「なつやすみの美術館」に できること

さて上述した以外にも、通常のフロアレクチャーに加え、地域のNPOの協力による体験型作品のワークショップや出品作家のアーティスト・トークなど、さまざまな教育普及事業を実施した今回の「なつやすみの美術館」展でした。最後になりましたが、ご協力頂きました方々に、心からお礼申し上げます。

この展覧会は、子どもたちを主な対象にしていると言うものの、実際のところ、展覧会の内容や作品自体が子ども向けであるというわけではありません。美術というのはどんな世代でもそれぞれの方法で受け止めることができるものです。実際、大人の方から数多く耳にした「毎回、なつやすみの美術館を楽しみにしているのですよ」とい



展示室の外には、来館者が気に入った作品を投函する「みんなの時間ポスト」を設け、黒板に模したパネルに掲示しました



最終的には何層にも重なり 300 枚を超えました

励みになる意見は、その現れでしょう。

もちろん作品の内容や作者の意図にどうやって近づくか、その方法にも正解はありません。突き詰めれば、ワークシートなどなくとも、誰かのガイドがなくとも、自分一人で作品を楽しめるようになるのが一番なのですが、そのためには経験が必要ですよ。この展覧会は美術を楽しむためのウォーミングアップの場であり、われわれが先生方

や大学生たち、さらには来館者に協力を仰ぎ、試行錯誤して取り組んでいる教育普及事業は、そのための複数のアプローチです。子どもたちに限らず来館者一人ひとりが、そのどれか一つに興味を持ってくださり、何か一つ発見を持って帰れる、そんな「なつやすみの美術館」を続けてゆきたいと考えています。
(青木加苗)

アーティスト・トーク 佐藤時啓 ＋ ワークショップ 光とあそぼう！

今号の表紙は、「美術の時間」展に出品された写真作品です。7月27日、その作者である佐藤時啓氏によるアーティスト・トークを開催しました。佐藤氏には2010年からの足掛け4年、NPO法人和歌山芸術文化支援協会(wacss)と当館が協力して実施してきた、カメラをテーマとしたワークショップの講師を務めていただきましたが、今回初めて、作家としての素顔とともに、ご自身の作品を展示室でご紹介できました。

佐藤氏はお話の中で、ご自身の作品を三つに分類されました。ひとつ目はペンライ



講演の様子

トや太陽光を反射させる鏡を手にしてカメラの前を移動し、身体の動きを光の軌跡に置き換えてフィルムにおさめる、モノクロ写真のシリーズです(左下、講演の様子の写真)。

一方、表紙の作品は「収穫された光」というテーマで制作され、24個のピンホール・カメラを球体につないで撮影されています。穴を開けただけの箱に、外の景色を反転する像として映し出すカメラの基本的な仕組みは、まさに光を収穫する行為です。

そして三つ目は「ワンダリング・カメラ」という小型のキャンピング・トレーラーのようなかたちをした移動式カメラを使ったシリーズです。中に入って映し出された映像を体験し、撮影することができるプロジェクト的な性格の作品ですが、佐藤氏の幅広い活動の中で、人と関わりを持つことで成立する作品が大きな位置を占めていることがわかります。このトークの翌日、当館でも



ワークショップを終え、真っ赤な《リヤカメラ》と記念撮影

《リヤカメラ》という中に入れる牽引式カメラを使ったワークショップを実施しましたが、これまで継続してきたワークショップの活動も含めて、ご自身の活動にとって大きな位置を占めていることが、参加者にも伝わったことでしょう。

お話を伺って改めて感じたのは、佐藤氏のすべての活動に共通して、カメラや写真という媒体の仕組み自体が、作品の持つ魅力や、見る人・体験する人の驚きに直接つながっているということです。今回の展覧会とワークショップで、三つのテーマのうち、二つを知ることができたわけですが、そう遠くない将来、ひとつ目のシリーズも当館でご紹介できればと思っています。(青木加苗)

*当館で行った佐藤氏のワークショップについては、NEWS No.63, 68, 74 においても触れています。
*本事業は wacss の主催により、一連の活動についての記録集発刊記念および展覧会の関連事業として実施したものです。

講演会「瑛九版画の魅力 —制作者の視点から—」

講師 田島直樹

(筑波大学芸術系准教授、版画家)



瑛九《雲》1957 リトグラフ、紙

去る7月21日、開催中の展覧会「瑛九：紙の上の仕事」に関連して、版画家で筑波大学准教授でもある田島直樹先生に、瑛九の版画制作の特質についてご講演いただきました。先生は2010年に筑波大学で行われた大学所蔵作品に関する共同研究の中で、実際に瑛九の銅版画作品を再現制作して、その制作工程を検証されています。今回のお話の中でも、リトグラフについては同大学博士後期課程に在籍中の城

山萌々氏の再現制作をもとに、両技法の細かな制作過程を、段階を追って解説していただき、また当館所蔵の瑛九作品《雲》についても、同じ作品の別刷りと比較しながら、その特質についてお話いただきました。

なかでも興味深かったのは、短期集中的であった瑛九の版画制作について、単に作品点数を数えるのではなく、ひとつの作品での版数やプリント枚数をもとに、実際にプレス機をどれだけ回したのかということま



で試算されたことです。具体的には、2年間でおよそ150点のリトグラフと70点の銅版画を制作していたわけですが、おそらく1万回近くも、力のいるプレス作業を行っていたこととなります。その労力がいかほどのものであったかは、私たちの立場からは思いもよらない制作者ならではの視点であり、あらためて瑛九という芸術家のエネルギーを考えさせられるひとときでした。

(宮本久宣)

大規模災害への対応 進む情報共有

全国美術館会議^{*1}のホームページ運営に関わってきた筆者は、2008年5月、同会議の総会で、「大規模災害への美術館の対応に役立つ参考資料が全国美術館会議ホームページのなかで探しやすいよう工夫する」といった趣旨の約束をしたものの、約3年後の、東北地方太平洋沖地震の発生の日までこの作業を放置していた…筆者が自省の念を込めて書いた当館ニュースNo.70^{*2}の記事を覚えておられる方もいるだろう。

じつは同様の反省は地震発生後、東北地方に救援に入ろうとする多くのミュージアム関係者からも耳にした。「災害時の連絡体制をもう一度確認し見直そうと言っていた矢先に地震が起きた。」「対応の参考になる阪神・淡路大震災関係の文献を整理しておけばよかった。保管場所を探しあてるのに初動の貴重な時間を費やしてしまった。」等々である。しかし関係者たちによるそのような反省は、震災から2年半経った今、次の取り組みに活かされようとしている。

本年1月23日、2月4日、2月22日の3日間にわたり、東北地方太平洋沖地震被災

文化財等救援委員会の主催により東京国立博物館平成館大講堂で公開討論会が開催された。いわゆる文化財レスキュー事業の実施主体として2011年4月15日に設置され、2年間活動を続けてきた同救援委員会の設置期間が、本年3月31日で終了するにあたって企画されたものである。「この2年間、被災地において実際に文化財の救出にあたった日本中の専門家たちと被災地の担当者とがその活動を振り返り、意見を述べ合った。」^{*3} 全国美術館会議からは企画幹事の村上博哉氏(国立西洋美術館学芸課長)をはじめ5名が出席した。

6月30日に発行された公開討論会報告書は360ページに及ぶ膨大なものだが、その編集を担った東京文化財研究所、東京国立博物館、文化庁、救援委員会事務局の職員は、ウェブ上での報告書公開についても登壇者の承諾を求め、早くも本年9月10日には公開をはじめている。

http://www.tobunken.go.jp/japanese/rescue/report/report_toron/index_1.html

同日に『平成23年度活動報告書』(314

ページ)及び『平成24年度活動報告書』(208ページ)もアップされた。

他方、全国美術館会議も、美術館、博物館が受けた被害とその影響を総合的に調査、記録するワーキンググループ^{*4}と文化財レスキュー参加者の声を集めた記録集を作成するワーキンググループ^{*5}を設け、活動を進めている。いずれも来年度の早い時期に刊行とウェブ上での公開を予定している。

このような刊行物やウェブ上での公開が、次の大規模災害に備える上で重要であることは言うまでもない。重要な課題を放置したまま2011年3月11日を迎えたという、その苦い経験をバネにして、筆者も情報共有の活動に関わって行きたいと考えている。

(浜田拓志)

^{*1} 全国360館あまりの国公私立美術館・博物館が加盟。<http://www.zenbi.jp/>

^{*2} 2012年3月30日発行

^{*3} 『東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会 公開討論会報告書』(2013年6月13日発行)3頁

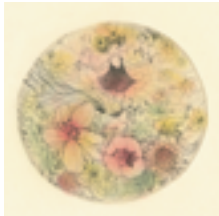
^{*4} グループの名称は「東日本大震災美術館・博物館総合調査分科会」活動は下記サイトに掲載
<http://www.zenbi.jp/earthquake/tohoku/060/museum-s/>

^{*5} グループの名称は「東日本大震災文化財レスキュー事業記録集分科会」活動は下記サイトに掲載
<http://www.zenbi.jp/earthquake/tohoku/060/rescue-r/>

今年の友の会版画プレゼントは、 安井寿磨子さん。

毎年好評いただいている友の会版画プレゼント。平成25年度は安井寿磨子さんの作品です。作品のテーマは「四季」。4作品からお好きな1点をお選びいただけます。

9月28日(土)には、講演会「版画とわたし」を開催し、お話を伺いました。



1. 春開く



2. 夏の樹



3. ちぎれる秋



4. 冬の器

いずれの作品も、2013年制作。エッチング・手彩色。紙。限定各100部。

安井寿磨子さんは、1956年大阪府堺市生まれ。大阪芸術大学美術学科卒業後、銅版画を多く制作し、関西を中心に定期的に個展やグループ展で発表を続けています。繊細なエッチングの線の上に、一枚ごとに手彩色がほどこされた、童画のようなやさしい画面が特徴です。その幻想的で不思議な世界は村上龍、藤本義一、池上永一などの装丁にも使われ、また近年は、新聞の挿絵の書籍の仕事などで多くファンを魅了しています。

Museum Calendar

開館/9時30分～17時00分(入場は16時30分まで) 休館/月曜日(祝休日の場合は開館、翌平日休館)

モノ 物質と美術

12.17(火) - 2.11(火・祝)



小清水漸《花・赤い》1986

美術作品を構成する物質は、ただ作品の素材であるだけではありません。作品がそうあるために必要な理由でもあります。物質という側面から作品について考える展覧会です。

コレクション展 2013-秋

9.14(土) - 12.1(日)



案本一洋
《岬》
1938

「和歌山ゆかりの作家と近現代の美術」、「アメリカの戦後美術」、「田中恭吉とその周辺の絵画」という3つのコーナーにより、コレクションをご紹介します。

特集展示 没後100年 香山小鳥

9.14(土) - 12.1(日)



香山小鳥
《愁》
1913

創作版画の草創期に重要な足跡を残した香山小鳥(1892-1913)。親友だった田中恭吉と恩地孝四郎によって、彼の版画や絵葉書等が今日に伝えられました。没後100年を記念し、そのすべてを公開します。

版画について考える

2.18(火) - 3.30(日)



村井正誠
《黒い太陽》
1962

『大阪朝日新聞』に特集「版画展覧会」が掲載されて100年。作り手の「自画、自刻、自摺」により、版画を近代的な美術作品と位置づけようとした創作版画、現代版画の問題を考えます。

コレクション展 2013/14-冬

特集展示 人間と宇宙のドラマ：

吹田文明・堀井英男・長岡國入

12.17(火) - 2014.2.23(日)



堀井英男《magic room 82-9》1982

コレクション展 2014-春

特集展示モノクロームの世界

2014.3.1(土) -

その他

第67回和歌山県美術展覧会

I 10.31(木) - 11.4(月) II 11.6(水) - 11.10(日)

和歌山県文化表彰の歩み展 創立50周年記念

11.23(土) - 12.8(日)

メールマガジンのご案内

展覧会の情報はもちろん、講演会、トーク、ワークショップなど当館に関連するタイムリーなトピックスを定期的にお届けしています。当館ホームページよりご登録いただけます。ぜひご利用ください。



友の会
会員特典
いろいろ

1. 展覧会の無料観覧(同伴者1名まで)
2. 展覧会レセプションへのご招待
3. 展覧会のご案内、美術館ニュース、その他情報の配布
4. 当館ミュージアムショップ、レストランでの割引
5. 各種行事への参加(美術鑑賞ツアー、ミュージアムコンサートなど)
6. 版画の頒布会への参加

入会のご案内

一般会員 6,000円
学生会員 3,000円

ミュージアムショップにてお手続きいただけます。会員証即日発行。郵便振替でもお申し込みいただけます。詳しくは友の会事務局まで。

Tel. 073-436-8690 担当：松原

